

二まいの絵

ぼくの学校では、運動会のマスコットキャラクターを決めるのに、一年生から六年生までの各クラスから一点ずつ、候補を出すことになっている。

「今年もやっぱり、真一のかいたキャラクターが選ばれるのかな。」

朝、登校しながら、同じクラスの広志が言ってきたので、

「そうだね。真一のかいたキャラクターで決まりだと思うよ。」

ぼくと広志と真一は、一年生の時から同じクラスで、いっしょに遊ぶことも多く、とても大切な仲間だ。真一はアニメのキャラクターをかくのが得意なので、クラスみんなから、よく「かいて、かいて。」とたのまれている。昨年、クラスの代表になったキャラクターは、真一がかいたものだ。だから、ぼくは、今年も真一がかいたキャラクターを選ぼうと、心に決めていた。



学級活動の時間の最後に、いよいよマスコットキャラクターを選ぶことになった。

黒板にはられたそれぞれのキャラクターの画用紙には番号がつけられていて、だれがかいたのかは分からないようになっている。

「この中から、運動会のキャラクターとして、よいと思ったものを選んでください。前に来て見てもいいですよ。」

司会の説明のあと、黒板の前に集まったみんなは、キャラクターの絵の一つ一つをながめ始めたが、すぐにそのし線は右はじめの一まいの絵に集中した。

「すごい。」

「とてもうまいね。」

と声が聞こえてきた。

その絵は、赤いドラゴンが、空を飛びながらゆう勝旗をふりかざしている絵だった。

（あ、あれは清の絵だ……。）

今朝、清は登校してすぐに、あの絵を先生にわたしていた。ぼくは、それを見てしまったのだ。清の方を見ると、とてもはずかしそうにしていた。

清はおとなしいせいかくで、みんなといっても、自分からはあまり話そうとしない。ぼくも



いっしょに遊んだことはほとんどない。あらためてその絵を見ると、とてもいいねいにかかれていて、時間をかけて完成させたことが伝わってくる。

（そうだ、真一の絵は……。）

と、ぼくは、真一の絵をさがし始めた。

（そういえば、真一は広志とぼくに、今年はライオンのキャラに言うていたっけ。）

ライオンの絵は一つしかなく、黒板のちょうど真ん中あたりにあった。それは、赤い服に金色の帯をしめたライオンの絵だった。

（あれ……。真一の絵も上手なんだけど、清の絵のほうが、いいな……。）

「席にもどってください。投票用紙を配ります。」

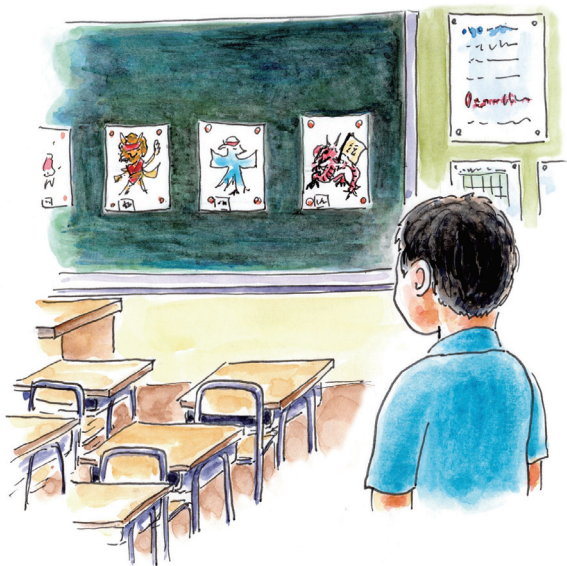
司会の声がひびき、席にもどったぼくは、

（どうしよう……。）

と考えこんでしまった。ふと、真一の方を見ると、その真一と目が合った。その目は、（ぼくのキャラクターに投票してくれよな。）とたのんでいるように見えた。

ぼくは少ししまったが、結局、真一のキャラクターの番号を書いて投票した。





(早川 大介 作)

休み時間に、ぼくは広志^{ひろし}に声をかけた。

「やっぱり真一^{しんいち}のキャラクター、よかったよな。今年も真一^{しんいち}のキャラで決まりだな。」

すると広志^{ひろし}は、まっすぐ前を見たまま、

「いや、ぼくは別のキャラクターにしたよ。」

と言うと、教室から出ていってしまった。

(ぼくも清^{きよし}のドラゴンのほうがいいって思ったのに……。)

ぼくは教室に残^{のこ}ったまま、黒板^{こくばん}のキャラクターの絵を、じっと見つめていた。